様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　5 月　27 日現在

機関番号：14501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2010
課題番号：19530696
研究課題名（和文）　『教育修身研究』誌に見る戦時下「文検」修身科の歴史的性格に関する研究
研究課題名（英文）　The historical character of the state examination for secondary school teachers of "Shushin-ka" during wartime through the analysis of the magazine "Kyoiku-Shushin Kenkyu"

研究代表者　船寄　俊雄（FUNAKI TOSHIO）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・教授
研究者番号　40181432

研究成果の概要（和文）：
『教育修身研究』誌は、「文検」の受験雑誌であった。受験の技法や情報を伝達するとともに、教師としての人間的教養の蓄積や「文検」受験を通しての人間的な成長を主張した。1937 年 7 月以降日中戦争が本格化するにつれて、その時局の変化が「文検」の試験問題に強い影響を与えた。同誌発行の中心人物は島為男であったが、その戦前戦後を通じた教育活動と著作は今日改めて評価されないといけない。

研究成果の概要（英文）：
The magazine "Kyoiku-Shushin Kenkyu" was for the state examination for secondary school teachers of "Shushin-ka".That communicated humanistic culture and humanistic growth through the state examination for secondary school teachers of "Shushin-ka" with the technique and information of examination. As the war between Japan and China turned serious on and after July in 1937,development of the situation had much influence on examinations of the state examination for secondary school teachers of "Shushin-ka".The leader of this magagine was SHIMA TAMEO.Today we must value his activities and literary works again throughout prewar Japan and postwar Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育史
キーワード：文検修身科、『教育修身研究』、吉田静致、深作安文、宇野哲人、友枝高彦

１．研究開始当初の背景

（１）着想に至った経緯

「文検」については、「『文検』の姿が見えてきた」（吉田文「『文検』試験問題の研究－戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習を読んで」、『日本教育史研究』第 23 号、2004 年、105 頁）と評されるように、ようやく最近になって研究の成果が認められるようになっ

た。

研究を着想するに至った理由は二つある。一つは、申請者の手元にある『教育修身研究』という雑誌を、死蔵することなく有効に活用し、その存在意義を世に知らしめたいということである。申請者が所蔵する同誌は、その発行に携わっていた富田義雄（1906～1993 年）が所蔵していた全冊を文検研究会が借り受け、同氏の許可を得て複製を３セット作成したもののうちの１セットである。国立国会図書館をはじめ全国の公共図書館はもとより、大学図書館にもまとまって所蔵されていない極めて貴重な雑誌である。

いま一つの理由は、「文検」の研究はこの 20 年間に大きく前進したが、諸般の事情から「修身科」に関しては依然として解明が進んでいないという状況にあるということである。申請者が、財団法人上廣倫理財団から研究助成を得て個人的に研究を進めてきた実績を土台に、今回は、15 年戦争下における「文検」修身科の研究を深化させたいと考えている。

（２）本研究に関する国内・国外の研究動向および位置づけ

「文検」研究は、この 10 数年間で非常に研究が進展した。「文検」研究開拓の必要性をいち早く示唆した寺崎昌男は、1986 年に「文検」研究会を組織して研究に着手し、『「文検」の研究』（学文社、1997 年）と『「文検」試験問題の研究』(学文社、2003 年) が公刊された。研究代表者は、同研究会の一員としていずれの著作にも執筆している。

しかし、最大の受験者数を抱えていたと思われる「国語及漢文科」、「物理科」「化学科」「博物科」など自然科学関係学科目、さらには「修身科」「図画科」「体操科」の分析などが残されており、「文検」を総体的に把握するまでには至っていない。中でも「修身科」は、日本近代において修身教育が果たした役割の大きさからいえば、その分析が最も急がれる。

２．研究の目的

「文検」修身科の歴史的性格、とりわけ 15 年戦争下のそれを、『教育修身研究』という雑誌（1931 年創刊・1944 年廃刊）の分析を通して明らかにすることである。なお、「文検」とは、「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の略称のことである。

３．研究の方法

次の四つの課題を分析した。

（１）『教育修身研究』誌に関する書誌的事実の解明と総目次の作成を行った。

（２）『教育修身研究』誌掲載の受験体験記から、①受験の動機、②受験生のキャリア、③受験勉強の内容、④合格後の進路の四つを抽出した。

（３）「文検」修身科の試験問題の分析として次の作業を行った。

①『教育修身研究』誌掲載の「試験問題の批判並に解答」欄の分析。

② 同誌掲載の受験（合格）体験記による指摘の分析。

③同誌の特色である本試験受験生のための座談会の言説の分析。

④同じく同誌の特色である模擬試験欄の分析。

（４）「文検」修身科の試験委員に関し、①試験委員の著作の収集と分析、②『教育修身研究』誌の特色である試験委員批評の言説の分析を行った。

４．研究成果

上に記した四つの課題を中心に研究を進めた。その経過を年次別に概述しておく。

（2007・2008 年度）

（１）『教育修身研究』誌に関する基礎的データの整理を行った。目次を基礎に、それだけでは判明しない雑纂の内容等までを含めた詳細な目次を作成した。

（２）「文検」修身科に関する基礎的データとして、「文検」修身科の制度に関するデータの整理と「文検」修身科に関する社会史的データの整理を行った。すなわち、『教育修身研究』誌に掲載された受験（合格）体験記による受験生に関し、受験の動機、受験生のキャリア、受験勉強の内容、合格後の進路についてのデータを収集した。

（３）「文検」修身科試験問題の分析のための資料収集を行った。具体的に行った作業は次のとおりである。

①『教育修身研究』誌掲載の「試験問題の批判並に解答」欄の収集。

②同誌掲載の受験（合格）体験記による指摘の収集。

③同誌の特色である本試験受験生のための座談会の言説の収集。

④同誌の特色である模擬試験欄の収集。

（４）「文検」修身科試験委員の分析のための資料収集を行った。具体的に行った作業は次のとおりである。

①試験委員の著作の収集。
②『教育修身研究』誌の特色である試験委員批評の言説の収集。

（2009・2010 年度）

（１）『教育修身研究』誌の書誌情報の整理を継続して行った。

（２）『教育修身研究』『文検世界』『文検受験生』の「文検」受験の専門誌、および関係教育雑誌から受験（合格）体験記の収集・整理を継続して行った。取り出した情報は、①受験の動機、②受験生のキャリア、③受験勉強の内容、④合格後の進路等である。

（３）吉田静致、深作安文、宇野哲人、友枝高彦の４名の試験委員の著作目録の作成および著作の収集を行った。

（４）中等修身科の教科書の収集に着手した。まず、国立国会図書館が電子化して公開している資料の複写を行った。次いで、「日本の古本屋」に登録している古本屋が所蔵している当該著作を購入した。

（５）中等諸学校における修身教育の実践に関する資料の収集を行った。具体的には旧制中等諸学校を前身とする新制高等学校の沿革史、旧制中等諸学校の卒業生や教員による回想録の収集・整理である。

昨年４月に提出した「自己評価報告書」に記載したとおり、研究が順調に進んだわけではないが、必要な資料の収集はほとんど終了しており、研究代表者の研究室に保存されている。今後その公開に向けて鋭意努力していく。

なお、『教育修身研究』誌に関して明らかになった成果を以下に記載しておく。

（１）『教育修身研究』誌は、日本教育学会が 1931 年４月に創刊した。責任者は佐藤武。佐藤は、沢柳政太郎が成城小学校を設立（1917 年４月）した際、長田新の推薦により同校の教員になった。長田は、佐藤が大分県師範学校在学時の学年主任であった。その後、成城小学校を辞め、大分県出身の尼子止が経営する出版社モナスに入ったが、1924 年に独立して日本教育学会を起こした。

同会は、学年別教材本意主義雑誌の発行元であったが、同時に教員組合運動の活動家であった上田庄三郎などが編集した『教育新潮』も発行していた。その特徴が『教育修身研究』の編集にも反映して、社会主義や唯物史観に強い共感した記事が掲載されたり、思想傾向において特異であった。ただし、創刊に携わった佐藤武は、同時に日本教育の確立や精神主義的教育の充実を声高に主張しており、同誌の性格を単純に規定することはできない。この同誌の性格をめぐる確執は、やがて佐藤武から島為男へ編集者が交代する背景となった。

（２）同誌は「文検」の受験雑誌であったが、単に受験の技法や情報を伝達するだけではなく、教師としての人間的教養の蓄積や「文検」受験を通しての人間的な成長を主張する点で特徴があった。したがって、模擬試験の実施・講評・優秀論文の掲載は大変な人気企画であったが、その編集の姿勢は学問的、原理的であり、受験一辺倒ではなかった。それがよく表れているのは合格者と編集者を交えて行われた座談会であった。創刊当初より「文検」試験委員の学説や場合によっては思想内容に踏み込んだ批判が行われていたが、1934 年に島、富田義雄、平良恵路が編集に参加するようになってからその傾向は著しくなった。

（３）試験委員や試験問題に対し批判的であることは、受験者にとって好ましい結果をもたらさないという受験の鉄則は同誌の各所で述べられているが、辛辣かつ妥当な批判が提出されることが同誌の特徴であり魅力であった。例えば、著作が多かった試験委員の深作安文に対しては、同一内容の焼き直しが多いのですべての著作に目を通す必要がないことや、国民道徳が強調される時局に迎合するため自身の従来の学説と矛盾をきたしているとの批判がそれである。

（４）1937 年７月以降日中戦争が本格化するにつれて、その時局の変化が「文検」の試験問題に影響を与え始めた。国民の思想形成に直接関与する教科だけに、その影響はすぐさま同年の年末に実施された本試験に現れた。自由主義や個人主義を排除する方向で答案を書かないと合格できないと編集者たちが言わざるをえない状況が出現した。しかし、それは編集者たちがまったく時局迎合的受験指導を行ったことを意味しない。時局に迎合し、学説を変更していく試験委員を厳しく批判する場面もあったし、その点が同誌の性格を特徴づけている。

（５）同誌発行の中心人物は島為男であった。同誌の発行元が精神文化学会に移った 1937 年から座談会は彼の自宅を会場として行われるようになった。彼

に対し個人的に質問や相談が殺到することになり、それは同誌の発行部数の増加につながった。やがて合格者のネットワークができ、それは戦後「永福同学の会」の結成に発展した。しかし島は、同誌を通じた受験指導が、「文検」という国家試験を通じた「官学思想」の伝播であることを深く憂えてもいた。したがって、彼の思想は公安当局が注視するところでもあった。戦後になって、島は国の教育政策を批判する著作を発表するが、それは戦前から一貫する「官学思想」批判であった。戦前国家権力と「親和」的であった教育学や倫理学は、戦後一転して国家権力と「対決」的に発展していくことになるが、島は戦前も戦後もアカデミズムや民間教育運動の世界で生きなかっただけに、その教育思想は注目されることはなかったが、今日改めて評価しないといけない人物である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①山本朗登、船寄俊雄「中等修身科文部省検定教科書一覧表」『教育科学論集』第 11 号、
神戸大学発達科学部教育科学論コース、2008 年査読無。

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

６．研究組織
(1)研究代表者
船寄　俊雄　（FUNAKI TOSHIO）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・教授
研究者番号：40181432